

— 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

お互いに「読む」ということを、ごくごく気軽に考えている。二口目には、読んだ、読んだ、と言う。そのくせ、どういふのが、本当の「読み」であるかには、まるでカンシン^aがない。とうとう一生のあいだ一度も、それを考えることなくして終わる人がはなはだ多い。

まず、新聞。

新聞くらい読めなくてどうする。人はそう言うだろう。果たして、新聞を読むのは、そんな簡単なものかどうか、立ち止まってそれを自問することはまれである。

たとえば、スポーツ欄^{らん}の記事。

これが読めるかどうか、まじめに考える人はほとんどいないに違^{ちが}いない。そんなものがわからなくて、どうする。人をバカにするな、といきま^いくかもしれない。たかが、新聞のスポーツ記事くらい、とたか^いをくくる。

プロ野球の試合結果はどうか。

「西武が山崎^{やまざき}の適時打で投手戦にケリをつけた。延長^b十一回、西武は二四球で二死一、二塁^{るい}の好機をつかみ、この試合安打のなかった山崎が外角球を流し打ち。打球は、本塁返球に備えて前進守備をしていた近鉄外野の右中間を抜^ぬけて、サヨナラ勝ちとなった。

久保は速球、スライダーがよく決まり、東尾^{ひがしお}と互角^{ごかく}に渡り合^{わた}う力投。しかし、投球数が百五十を超^こえた十一回は、さすがに疲れ^{つか}れが出たようで、制球のわずかな狂^{くる}いにつけこまれた。東尾は前半、ややスピード不足だったが、しり上がりに調子を上げた」

これは、西武・近鉄十二回戦、3×2で西武の勝った試合である。

この記事を読んで、どういうわかり方をするかは、人によって一様^②ではない。個人差ということは一応別にして、わかり方に差の生じる事情のあることを忘れてはならない。

この文章を見て、いちばんよくわかると思うのは、実際にこの試合を見た人たちである。この試合、テレビ中継^{ちゅうけい}があつたかどうか、知らないが、もしテレビ中継された試合なら、それを見た人も同じ仲間に入る。

日ごろから、西武か近鉄をひいきにしているファンであれば、実際に試合は見ていなくても、まず、見た人に近いくらいよくわかんと思えてよい。

A、試合も見えていないし、とくに野球好きというわけでもない素人は、この記事を読んで、わかりにくいと感じるところがいくつもある。だいいち、選手の名を知らない。ぶつつけに、久保とか東尾とかやられても面くらう。いったいどちらの選手なのか。(1)

B、東尾と互角に渡り合った久保が、どうして力投になるのかのニュアンスはさっぱりである。流し打ちということば、サヨナラ勝ちといった言い方もピンとこない。野球をすこしでも知っている人なら、ごく当たり前のことばに、素人はいちいちひかかる。(2) さらにいつそう野球にムチな読者もあるう。ルールさえ知らないで、こういう記事を読むことはまずあり得ないが、C、そういう人が読んだら、それこそ、チンプンカンプンである。(3)

新聞には、そういう記事、D、ある程度の知識がなければ、まるで見当もつかないような難しい記事が実はたくさんある。野球のことには精通していて、さきのような記事なら手にとるようによくわかんと思っ読者でも、株式市況のページに書いてあることはまるでわからない、ということはある得る。(4)

新聞は万人向けのもののように思われているが、理解するには、ある程度の予備知識、常識が必要である。社会面の市井の事件を報じる記事でさえ、わかるのには、ある程度、現代世相に通じていないといけない。孤島で三十年ひとり暮らしをしていたような人がひょっこりあらわれて、読んでも、わかるわけがない。

新聞を隅から隅までくまなく読んだ。退屈をしている人がよくそんなことを言う。ところが、読んでわかるにはかなり百科全書的知識をもっていることが条件になる。特定の欄だけなら隅から隅まで読めるかもしれないが、第一ページから、最後のページまでくまなく読んでわかるのはヨウイなことではない。

はじめの西武・近鉄戦の記事にしても、ファンの人、試合を見た人と、野球をあまり、あるいは、まったく知らない人とは、読まれ方がまったく違う。それを同じように読む、と言うのがおかしいのかもしれない。

ファンであれば、「山崎の適時打で投手戦にケリをつけた」が、いかにもうまい表現だと感心しよう。その「流し打ち」が目ざめるようなラインをふたたびほうふつさせてくれる。心がおどる。球場の興奮がよみがえるような気さえる。

こういう読者は、こまかいところにこだわることをしない。全体としてわかる。ことばはいわばその手引きをしているにすぎない。具体的経験や知識が先にあって、文章を読むときには、いつもこれに似たことが起こる。

他方、野球に不案内な人間が、さきの記事をわかんうとすると、一つ一つのことばにひっかかる。全体像がつかめない。部分のことばから攻めて行くほかに手が無いのだが、その部分自体がまたわからないことづくめだ。手も足も出なくなつて、わかんうとすると、たいへんやっかいなことになる。

(外山滋比古『読みの整理学』)

問1 a s e のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

問2 Ⅰ「たかをくくる」、Ⅱ「面くらう」の意味を次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|-----------|---|---------------|---|--------------|
| Ⅰ「たかをくくる」 | ア | ひとまとめにして考える | イ | 念のためにと用心する |
| | ウ | 大したことないと見くびる | エ | バカにされたと腹を立てる |
| Ⅱ「面くらう」 | ア | 見分けがつかずあせる | イ | 予想外のことにまごつく |
| | ウ | いきなりのことに腹を立てる | エ | 理解できずに悲しくなる |

問3 ①「それ」が指している内容を二〇字以内でぬき出し、はじめと終わりの四字で答えなさい。

問4 — ②「わかり方に差の生じる事情」とは、どういうことですか。説明として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 野球についての知識があるかないか、という事情。

イ ふだんからよくテレビを見るかどうか、という事情。

ウ あらゆるスポーツに対して詳しいかどうか、という事情。

エ 社会の常識を持っているかいないか、という事情。

問5

A

D

 に入る語句を次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア かりに イ まして ウ それに対して エ たとえば オ つまり

問6 次の文は本文中の(1)～(4)のうちのいずれかに入ります。この文が入る番号を答えなさい。

「ただ、そういう読者は、頼まれても、こういう記事を読もうとはしないから、現実には問題がおこらないだけである。」

問7 — ③「孤島で三十年ひとり暮らしをしていたような人」とはどのような人をたどっていますか。最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 一人でも暮らしていける強い人。

イ 現代の世相に不満をもっている人。

ウ 自分の国の言葉を忘れてしまった人。

エ 現代の世相や常識に通じていない人。

問8 筆者が — ④「それを同じように読む」と言うのがおかしいのかもしれない」と述べていますが、読みに違いが生じるのはなぜですか。

説明として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア すべてのページを読み込むことで、分からない部分を野球についての知識でおきかえるようになっていくから。

イ 読む人があらかじめ持っている常識や、現代世相に関する情報量によって、理解できる内容が違ってくるから。

ウ 野球についての記事が好きなの人がいたり、株式市況の記事が好きなの人がいたり、好みによる違いがあるから。

エ 新聞記事の細かいところが気になる人がいたり、細かいところを気にしない人がいたりという違いがあるから。

問9 次のア～エについて、本文の内容として正しいものには○、正しくないものには×を書き入れなさい。

ア 新聞のスポーツ記事を読むということは、ごくごく気軽なことで、だれ誰にでもできることである。

イ 野球の記事をすらすらと理解できる読者は、株式市況のページに書いてあることはまるで理解できない。

ウ 記事に対する具体的経験や知識を前もって持っている読者は、記事の全体をイメージすることができ。

エ 記事の全体像をつかむためには、ひとつひとつの言葉を調べることで部分を理解していくことが必要である。

二 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「私」は小さなアーケード（商店街）の大家さんの娘である。大家さんである父は、アーケードの一番奥の倉庫に手を加え、本棚を作り、娘の本を並べて「読書休憩室」を作った。休憩室はアーケードのお店のレシートを見せると誰でも利用できる仕組みになっていた。「私」はこの休憩室で、飼い犬のべべと、同級生の「Rちゃん」と過ごすようになった。

Rちゃんは唯一、レシートなしで読書休憩室に出入できるお客さんだった。厳密に言えばレシートを持っていないのだからお客ではないのだが、彼女にはそういう細かいことを気にさせない。妙なふてぶてしさがあり、子供用ビニール椅子にその姿を認めても、アーケード中誰も注意を払う人はいなかった。当然な顔をして、大胆に、彼女はそこに座っていた。

けれど決して、私たちは友だちではなかった。学校の教室で彼女は無口だった。キャーキャー言っただけで、女の子同士手をつないで廊下を歩いたり、交換日記をやり取りしたりするのが好きではないように見えた。いつでも堂々と、一人ぼっちでいた。私たちが遠足へ持っていくお菓子や、三つ編みを結わえる色つきゴムについて悩んでいる間、Rちゃんだけは一人、他の誰も思い及ばないような事柄、例えばイグアノドン^aの親指の形について、あるいは空気圧縮機のコウゾウについて、考えているかのようなだった。

「どうしてあなた、Aばかり読んでるの？」

だから読書休憩室でRちゃんから話し掛けられた時は、驚いて上手く返事ができなかった。

「どうしてって言われても……」

私の戸惑いにも、頓着せず、彼女は『あしながおじさん』の表紙にちらりと目をやり、

「どうせハッピーエンドなんでしょう？ あしながおじさんは若くて格好よくてお金持ちで、そのうえ主人公の女の子にプロポーズするのよ」と言った。

「えっ……」

更にRちゃんは畳み掛けてきた。

「こっちの女の子は先生の虐待に健気に耐えて、最終的にはダイヤモンド王のイサンをたつぷり相続するし、こっちの男の子は手に負えないいたずらっ子で小人にされちゃうけど、そのおかげでガチョウに乗れて、いつの間にやら利口な少年になっているの。それでこっちの……」

「駄目。それ以上は言わないで。まだ読んでないんだから」

慌てて私が制止すると、「ふうん」と言っとうやく口をつぐんだ。

放課後、家の鍵とハンカチとちり紙を入れた手提げ袋を持ち、ほとんど毎日Rちゃんはやって来た。手提げ袋には彼女の横顔に似た少女の姿がアップリケで縫い付けられていた。読書休憩室で彼女は、学校とは全く別人のようにお喋りで、お節介で、生き生きとしていた。そこにたどり着いて、ようやく自分が吸うべき空気をとらえ、思う存分呼吸しているかのように見えた。手提げ袋を椅子の背もたれに引っ掛け、両手が自由になると同時に、彼女の心もカイホウされるのだった。

父が廃材で作った丸テーブルを間にはさみ、私はチューリップ、Rちゃんはひまわりの模様の椅子に座って二人は日が暮れるまで一緒に過ごした。おやつを分け合って食べ、喉が渴けばホットレモネードを飲み、しまいには胸焼けしてくるのが常だった。お互い区切りのいいところまで来ると、登場人物の性格について議論したり、ストーリー展開を批判したり、次に読む本をアドバイスし合ったりした。驚くべきことにRちゃんは私が読む本のすべてを既に読破しており、どんな細かい場面でも、ついさつき読み終えたばかりなのかと思うほどに鮮明に記憶していた。そして、私がうつとりする物語に限って、手厳しい言葉を浴びせた。

「ご都合主義」「甘ったるい」「軽薄」「気負いすぎ」。

Rちゃんは難しい言葉をたくさん知っていた。「ごつごうしゅぎ、って何？」と、私は尋ねなければならなかった。

② どんなに親しく口をきくようになってからも、学校では知らん振りのままでいた。目配せさえ交わさなかった。そうしてお互い、読書休憩室での秘密を守るための約束を、暗黙のうちに了解し合った。学校で一度でもそのことを口にしたら、もう二度と読書休憩室には入れないのだ、と二人とも固く信じた。

私が「嘘のお話」を好むのに対し、Rちゃんが求めるのは「本当のお話」だった。趣味が異なるおかげで本の取り合いにならずにすんだ。中でも彼女が最も愛したのは、百科事典だった。

それはいつかアーケードに現れたセールスマンから父が買った、十冊セットのカラー豪華本で、子供一人の力では本棚から取り出せないくらい重かった。とても高価だったのだが、百科事典を背負って歩き回り、疲れきって気弱になったセールスマンを父が気の毒に思い、無理をして月賦で購入したのだった。

Rちゃんは第1巻「あいう」の最初のページからスタートし、第2巻「えおか」、第3巻「きくけ」と順番に読んでいった。気紛れを起こして巻の順番を変えたり、つまらないページを飛ばしたりするような真似は決してしなかった。几帳面に、根気強く、一ページずつめくっていった。彼女に言わせれば、百科事典につまらないページなど一切存在しない、ということらしかった。

百科事典は丸テーブルの半分近くを占拠した。熱中してくるとRちゃんのお尻は少しずつ椅子から浮き上がり、それにつれて背もたれの手提げ袋はずり落ちていった。やがて片膝が椅子に載り、上半身はつんのめって百科事典を抱え込むような姿勢になった。どんどん両足が開いてパンツが見えるくらいになっても平気だった。私は彼女の邪魔にならないよう、テーブルの隅で大人しく『秘密の花園』や『幸福の王子』や『クマのプーさん』を読んだ。

アゼルバイジャン共和国の資源や、液体窒素の用途や、山高帽子とシルクハットの違いや、ロマネスク様式の特徴や、学校伝染病の分類について読んだからといって、一体何が面白いのか、正直、私にはよく分からなかった。何が彼女をそこまでのめり込ませるのか、見当もつかなかった。確かに、途中に差し挟まれる写真やイラストの中には、興味深いものがないでもなかったが（例えばロマノフ王朝ニコライ2世の顔はハンサムで素敵だったし、精巣の解剖図は秘密めいて胸が高鳴るほどだった）、その他多くは小学生の女の子には無用の項目だった。

（中略）

「早く、全部読み終わりたいなあ」

心の底からそう願うように、Rちゃんは言った。

「まだまだ、先は長いね」

どつしりと本棚に並ぶ百科事典の背表紙に、私は視線を落とした。Rちゃんはまだまだようやく第4巻に差し掛かったところだった。

「ねえ、見て。第5巻は「し」。し、一文字で一つの巻全部だよ。④ 凄いなと思わない？」

「うん」

何が凄いか自信が持てないまま、私はあいまいに返事をした。

「この世界では、し、ではじまる物事が一番多いの。し、が世界の多くの部分を背負ってるの。この、釣り針みたいな頼りない一文字が、実はひそかに一生懸命がんばってくれているんだよ。いいえ、自分は決して何の役にも立ってはおりません、みたいな顔をしてね」

⑤ 労をねぎらうように、彼女は第5巻の背表紙の「し」を撫でた。

「でもね、だからと言って他の文字を⑥ ないがしろにしているわけじゃないの。第10巻。栄光の最終巻。「むめもやゆよりるれろわん」。む、から、ん、まで全部で十三文字だよ。十三文字が仲良く手をつないで、十分の一の役目をしっかりと担ってる。それが、し、と比べて劣る役⑦

目だとは、私は少しも思わないよ」

うん、そうだ、確かにそうだ、と私はうなずいた。ベベも尻尾を揺らして床を一掃きし、同意を示した。

「ああ、最後の、ん、はどんなふうになってるんだろう」

Rちゃんはガラス戸の向こう、アーケードの偽ステンドグラスを突き抜け、アッピア街道を通り抜けたもつと遠くのどこかを見つめて言った。そこを見つめ続けていると、最後の、ん、が支える世界の欠片が浮かび上がってくる、とでもいうかのようなようだった。私とベベは彼女の邪魔にならないよう、じっと大人しくしていた。

（小川洋子『最果てアーケード』）

問1 ―― a e について、カタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

問2 〰〰〰アエの中で、言葉の働きが他と異なるものを選び、記号で答えなさい。

ア 厳密に イ 妙な ウ 大胆に エ そこに

問3 ―― ①「頓着」、―― ⑤「ないがしろ」の意味を次のアエからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

①「頓着」

ア 深く気にかけてこたわること

イ 悪いことをしたと心配すること

ウ まごつく相手にいらいらすること

エ 相手にしつこくつきまとうこと

⑤「ないがしろ」

ア 劣っていることに腹を立てること

イ あってもないもののように軽んじること

ウ にくたらしいものとして無視すること

エ そこにないものと思つてあきらめること

問4 A に入る語句を次のアエから選び、記号で答えなさい。

ア 西洋のお話 イ 嘘のお話 ウ 百科事典 エ ハッピーエンドになるお話

問5 ―― ②「どんなに親しく口をきくようになってからも、学校では知らん振りのままでいた」のはなぜですか。最も適切なものを次のアエから選び、記号で答えなさい。

ア 学校で読書休憩室のことを話すと、休憩室で感じていた、これまでのような「私」の自由な気持ちがなくなると思ったから。

イ 学校で読書休憩室のことを話すと、他の誰かに聞かれて休憩室に知らない人たちが押し寄せてくると思ったから。

ウ 学校で読書休憩室のことを話すと、これまでのような二人だけの秘密の場所としての休憩室が使えなくなると思ったから。

エ 学校で読書休憩室のことを話すと、学校の中でも休憩室のようにふるまわないといけなくなってしまうと思ったから。

問6 ―― ③「彼女をそこまでのめり込ませる」とありますが、のめり込んでいる様子の説明として当てはまらないものを次のアエから選び、記号で答えなさい。

ア 第1巻から順番に読み続けて、巻の順番を変えることなく読み進めること。

イ 子供一人の力では読めない難解な百科事典を几帳面に根気強く読み進めていくこと。

ウ 百科事典を抱え込むような姿勢になって、片膝を椅子に載せて本を読むこと。

エ 百科事典のどんなにつまらないページでも読み飛ばすことなく読み進めること。

問7 ―― ④「凄（す）いと思わない？」とありますが、「Rちゃん」が「し」を凄（す）いと思った理由を本文中の言葉を使って五十字以内で説明しなさい。

問8 ―― ⑥「十三文字が仲良く手をつないで」に用いられている表現技法を次のアエから選び、記号で答えなさい。

ア 直喩法 イ 倒置法 ウ 擬人法 エ 体言止め

問9 ―― ⑦「私とベベは彼女の邪魔にならないよう、じつと大人しくしていた」とありますが、「私」の「Rちゃん」に対する気持ちの説明として最も適切なものを次のアエから選び、記号で答えなさい。

ア Rちゃんが言っていることをぜんぶ理解できているわけではないが、Rちゃんに対して敬意を払う気持ち。

イ Rちゃんが言っていることを全然理解できないので、Rちゃんに対して今までにない怖れを抱く気持ち。

ウ Rちゃんの言っていることがぜんぶ理解できていないので、Rちゃんに対して距離を置きたいという気持ち。

エ Rちゃんの言っていることを理解できているわけではないが、Rちゃんのようになりたいとあこがれる気持ち。

問 2	
I	
II	

問 3

}

問 4

問 5	
A	
B	
C	
D	

問 6

問 7

問 8

問9	
ア	
イ	
ウ	
エ	

二	
問 I	
a	
	ス リ ン グ
b	
	ハ サ シ
c	
	和 口
d	
	カ イ ホ ウ

e		a	
	批判		コウゾウ
		b	
			イサン
		c	
			利口
		d	
			カイホウ

問 2					
問 3	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%; text-align: center; vertical-align: middle;">①</td> <td style="width: 90%; height: 150px;"></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center; vertical-align: middle;">⑤</td> <td style="height: 150px;"></td> </tr> </table>	①		⑤	
①					
⑤					

問 4

問 5

問 6

問 7

[illegible]

問 8

問 9

—	
— —	

得点	
----	--

受験番号	氏名
------	----